



三重高等農林學校農場 ふかつ 不渴の井戸

三重大学医学部附属病院付近には、かつて三重大学の前身である三重高等農林學校の実験農場が広がっていました。今はその面影はなく、当時の風景を思い浮かべることは難しいですが、ここには農場を維持するために不可欠な給水井戸が当時のままに残っています。

大正11(1922)年4月に第一期入学生を迎えた同校には、当初実験農場が整備されておらず、その確保が大きな課題でした。海岸近くの低湿地で、地表水は塩分濃度が高く農業用に適さないため、一部に農場自体を他所に求めるべきとの意見もありました。

しかし、当時の学長は農業分野をけん引する高等農林學校としてこの土地の改良に取り組むことを決意します。そして、教員・学生が一丸となって農場設置の前提となる用水確保に向けた井戸掘削が始まりました。今も大学に保管される当時の設計書には、上質の真竹を用いて管を継ぎ足し、3本の取水管を設置することが記されています。

大正13年に完成したこの井戸は、毎時72m³の真水を供給し、長年にわたって農場に十分な水量を確保してきたことから、いつしか「不渴の井戸」と呼ばれるようになりました。

井戸の直径は約9m。コンクリートは全て人力で練ったといわれ、当時の苦勞がしのべれません。94年が経過した今も頑丈な造りはそのままだに、常に水をたたえています。

低湿地で塩分濃度の高い過酷な条件下での土地改良の実践は、高等農林學校の威信を懸けた事業でもありました。当時の教員と学生が一致協力して取り組んだ成果は、日本の農業土木技術史に残る実践例として評価され、この給水井戸は平成28年度土木学会選奨土木遺産に認定されました。

大学構内の一角。木々に囲まれたこの給水井戸の周辺には遊歩道も整備され、教員・学生のみならず、ここを訪れる人々にその歴史と意義を静かに伝えています。



現在の給水井戸(フェンス内側)と土木遺産認定記念碑



建設当初の給水井戸(左端)と給水塔／三重大学提供

